

日本英文学会九州支部 第 71 回大会

期日 2018 年（平成 30 年）
10 月 20 日（土）・21 日（日）

場所 九州女子大学
(福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘 1 番 1 号)

日本英文学会九州支部

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8 丁目 19 番 1 号
福岡大学人文学部
山田英二研究室内
TEL (092) 871-6631 (代表)
E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2017-18 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

鵜飼	信光	(九州大学)
大島	由起子	(福岡大学)
大橋	浩	(九州大学)
木下	善貞	(北九州市立大学名誉教授、福岡女学院大学)
小林	潤司	(鹿児島国際大学)
高野	泰志	(九州大学)
高橋	勤	(九州大学)
竹内	勝徳	(鹿児島大学)
鶴田	学	(福岡大学)
登田	龍彦	(熊本大学名誉教授)
西岡	宣明	(九州大学)
虹林	慶	(熊本県立大学)
早瀬	博範	(佐賀大学)
福田	稔	(宮崎公立大学)
山田	英二	(福岡大学)

2018 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	山田	英二
副支部長・日本英文学会評議員	鶴田	学
『九州英文学研究』編集委員長	早瀬	博範
事務局長	秋好	礼子
書記	福原	俊平
書記	渡部	智也
書記	竹安	大

2018 年度 日本英文学会九州支部第 71 回大会 開催校委員・開催協力校委員一覧

開催校委員 中島久代（九州女子大学、開催校責任者）
開催協力校委員 大塚知昇、黒木隆善、田中雅子、永次健人、永松美保（九州共立大学）

九州女子大学 アクセス・マップ

〒807-8586 福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1番1号 TEL (093)693-3116 (総務課)

●折尾駅周辺



●自動車でのアクセス

九州自動車道を利用した場合

九州自動車道の八幡インターより北九州市都市高速へ乗り換え、黒崎インターを降り、折尾方面へ県道11号線を国道199号線まで直進

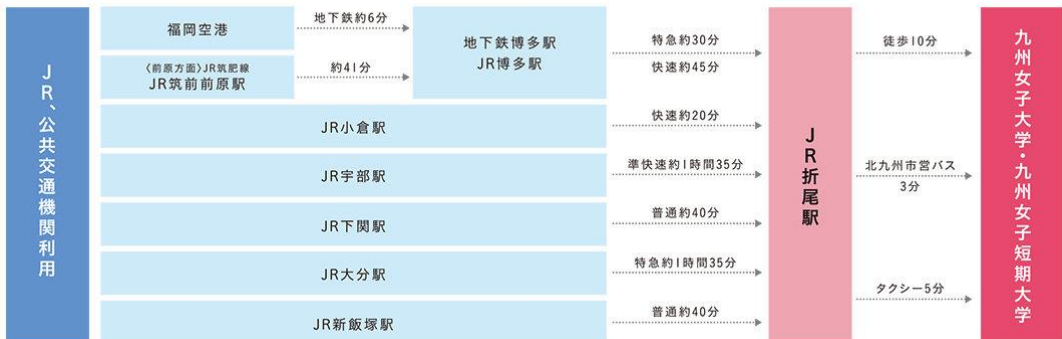
中国自動車道を利用した場合

九州自動車道の門司インターより北九州市都市高速へ乗り換え、大谷インターを経由し、東田インターから黒崎バイパスを通り、国道3号線に合流。折尾駅入口交差点から学園大通りを直進

国道199号線を利用した場合

「九州女子大学前」信号目印。

●電車でのアクセス



* JR 折尾駅北口および西口より九州女大方面に北九州市営バスが運行しています。

JR 折尾駅北口：北九州市営バス 70 番・90 番に乗車し、「九州女子大前」で下車

JR 折尾駅西口：北九州市営バス 64 番に乗車し、「九州女子大前」で下車

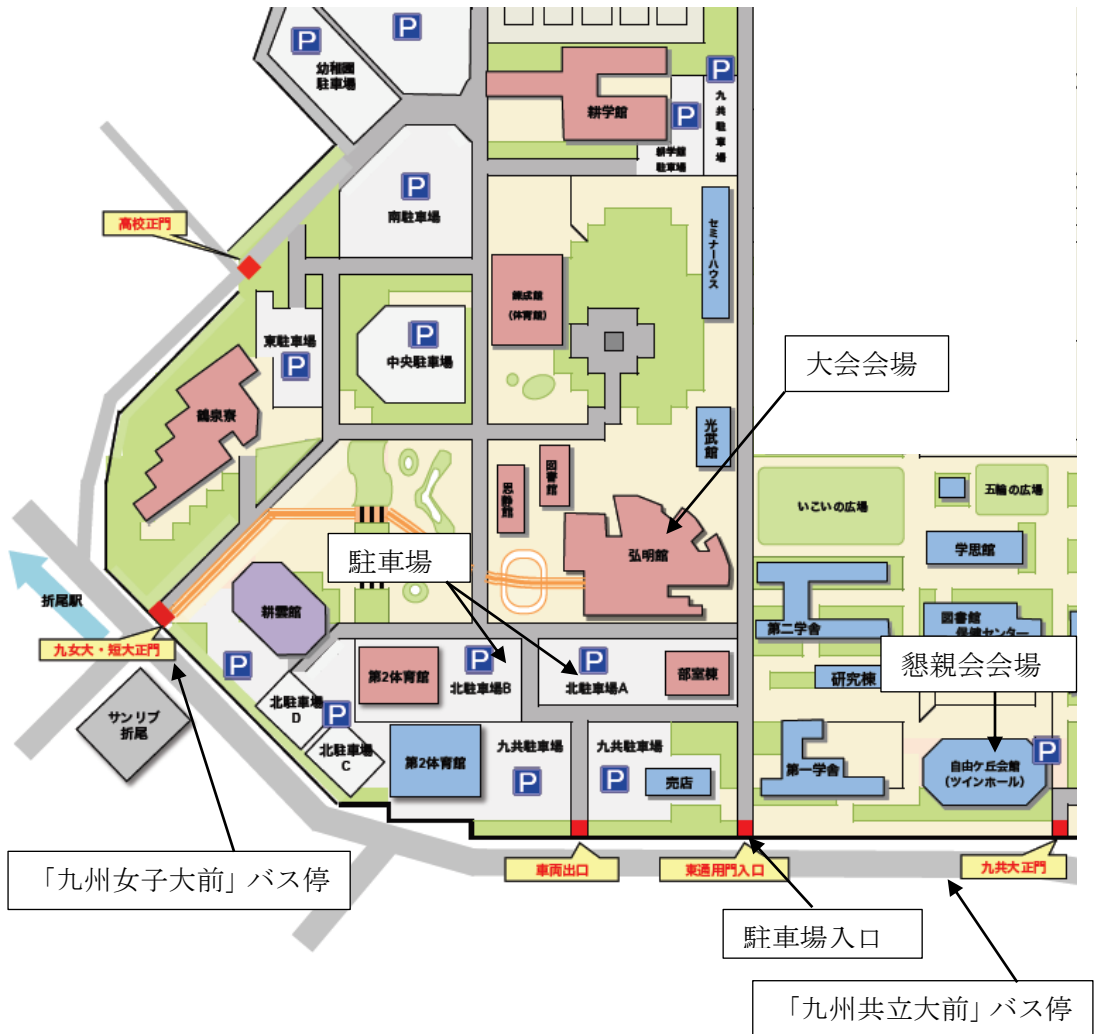
* 20 日（土）の懇親会に出席後、バスで折尾駅へ向かわれる場合は、「九州共立大学前」が最も近いバス停です。

* 車でお越しになる場合は、20 日（土）、21 日（日）ともに、九州共立大学東通用門からの入構が可能です。

宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/>

九州女子大学 キャンパス・マップ



【大会会場】九州女子大学 弘明館 1・2・4階

【懇親会会場】九州共立大学 自由ヶ丘会館 1 階

*学会期日に営業している学園内の売店

10月20(土)九州女子大学 静思館 1F「カナート」 8:30-13:00

*学会期日に営業している学園内の食堂

10月20(土)九州共立大学自由ヶ丘会館(ツインホール)1F 食堂
11:00-13:00

日曜日は、いずれも営業しておりません。

* 10月21日（日）の弁当を事前の予約にてご用意いたします。

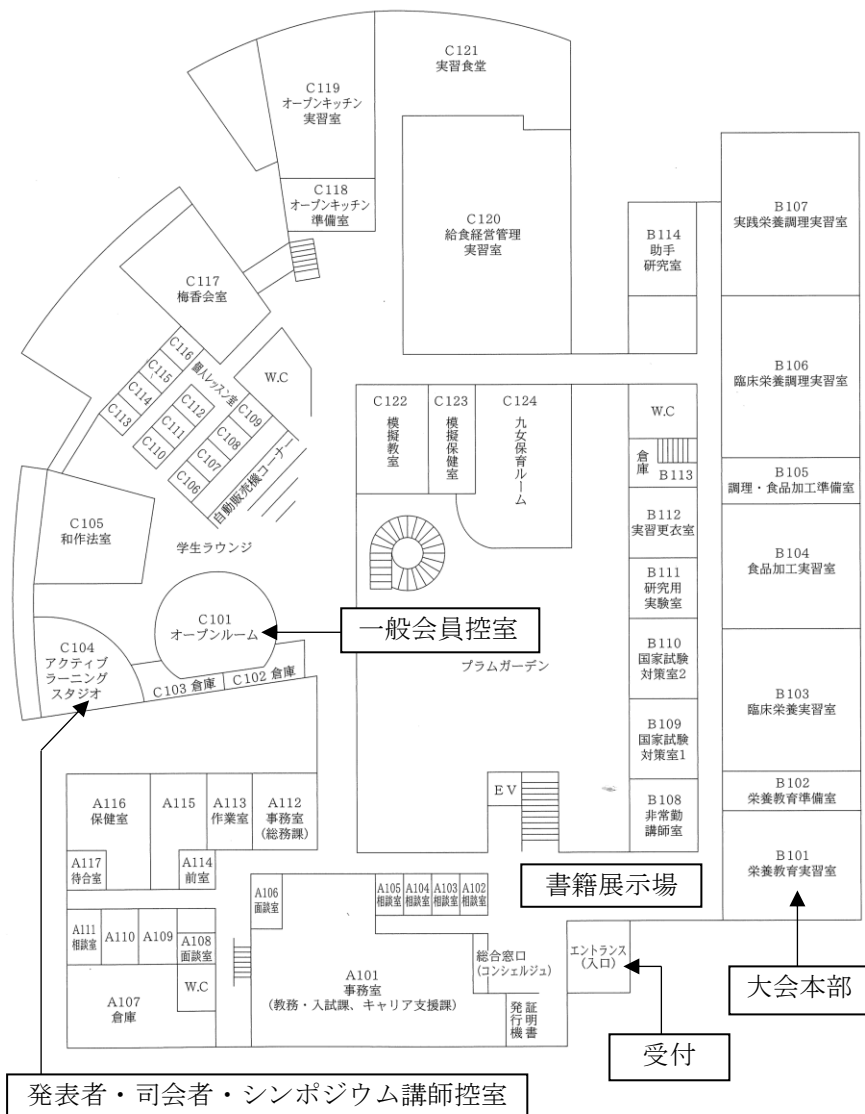
詳しくは、日本英文学会九州支部 HP (<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/index.html>) をご覧ください。

会場案内

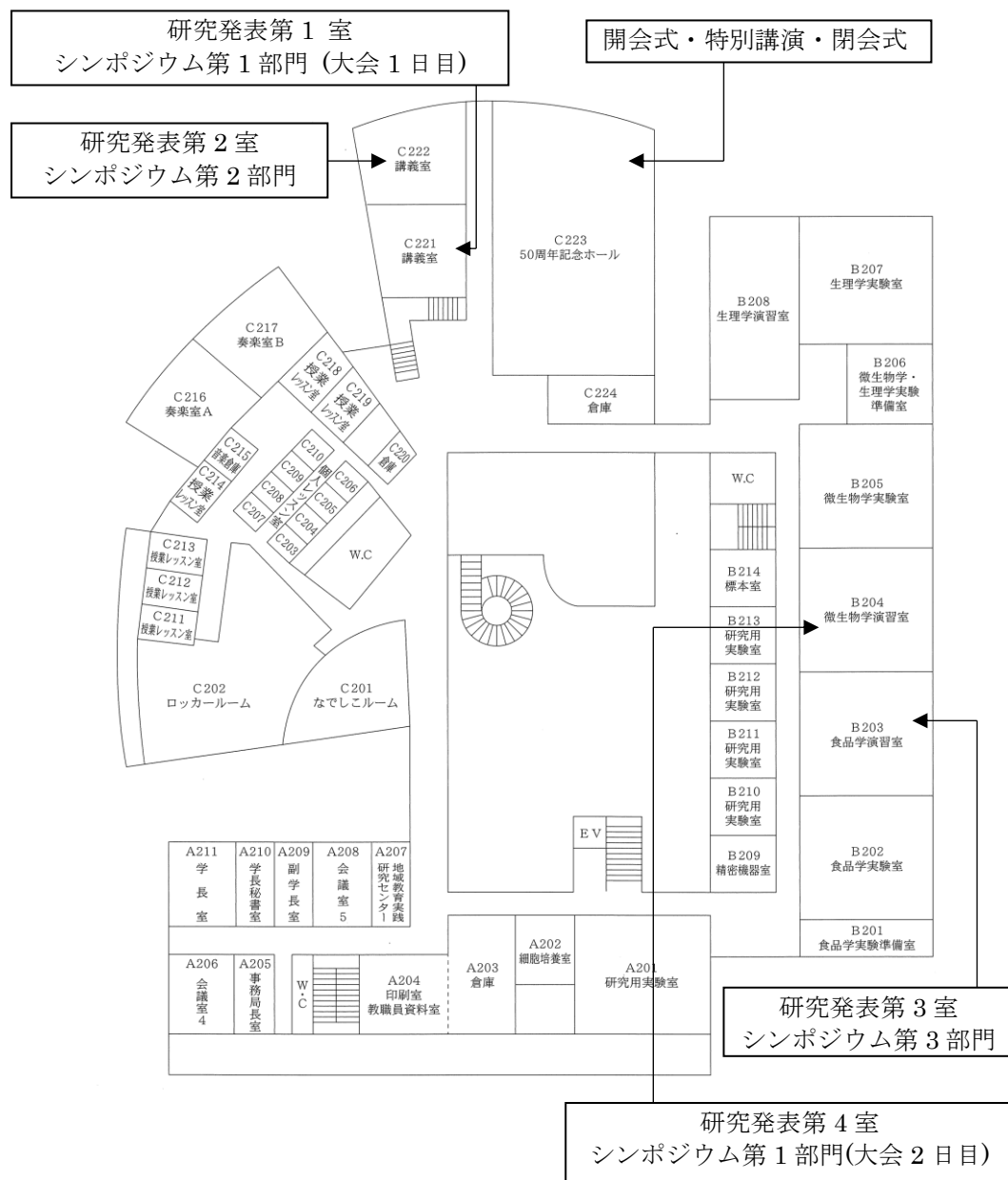
九州女子大学

〒807-8586 福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1番1号

弘明館1階平面図



弘明館 2 階平面図



大会本部 B101
 会議室 B401
 書籍展示場 弘明館 1 階エントランス付近
 開会式・特別講演・閉会式 C223 (50 周年記念ホール)
 シンポジウム

第 1 部門(イギリス文学) [大会 1 日目] C221 [大会 2 日目] B204
 第 2 部門(アメリカ文学) C222
 第 3 部門(英語学) B203

研究発表

第1室 C221

第2室 C222

第3室 B203

第4室 B204

発表者・司会者・シンポジウム講師用控室 C104

一般会員控室 C101 (オープンルーム)

懇親会会場 九州共立大学 自由ヶ丘会館 1階食堂

大 会 日 程

10月20日(土)

開 会 式 (13 時)

50 周年記念ホール (C223)

研 究 発 表 (①13 時 30 分 ②14 時 10 分)

第 1 室 (イギリス文学) C221

第 2 室 (イギリス文学) C222

第 3 室 (アメリカ文学) B203

第 4 室 (英 語 学) B204

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門 (イギリス文学) C221

第 2 部門 (アメリカ文学) C222

第 3 部門 (英 語 学) B203

懇 親 会 (18 時 30 分～20 時 30 分) (会費 5,000 円 学生 3,000 円)

10月21日(日)

シンポジウム (10 時～12 時 30 分)

第 1 部門 (イギリス文学) B204

研 究 発 表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第 1 室 (イギリス文学、アメリカ文学) C221

第 2 室 (英 語 学) C222

特 別 講 演 (14 時 00 分)

50 周年記念ホール (C223)

閉 会 式 (15 時 30 分)

50 周年記念ホール (C223)

受付

弘明館 1 階エントランス

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室

C104

一般会員控室

C101(オープンルーム)

書籍展示会場

弘明館 1 階エントランス付近

大会本部

B101

日本英文学会九州支部第 71 回大会プログラム

日 時：2018 年 10 月 20 日（土）・21 日（日）

場 所：九州女子大学

第 1 日 10 月 20 日（土）

（受付は正午より弘明館 1 階エントランスにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時 00 分より（50 周年記念ホール（C223））

	司会・福岡大学教授	鶴田 学
開会の辞	支部長・福岡大学教授	山田 英二
開催校挨拶	福原学園副理事長・九州女子大学副学長	奥田 俊博
開催校案内	九州女子大学教授	中島 久代
事務局報告	事務局長・福岡大学准教授	秋好 礼子
学会賞等選考報告	編集委員長・佐賀大学教授	早瀬 博範

研究発表（①13 時 30 分 ②14 時 10 分）

第 1 室（C221）

司会 北九州市立大学教授 田部井 世志子

1. 『指輪物語』最後の戦いに描かれる旧約の世界

福岡大学非常勤講師 島居 佳江

2. Ishiguro 文学における老いの表象——近年の作品を中心に
（招待発表）山口大学教授 池園 宏

第 2 室（C222）

司会 福岡大学外国語講師 濱 奈々恵

1. 忍耐とバランスの主人公
——*Persuasion* に見る、情念に向き合い続ける意志

九州大学大学院修士課程 福永 綾

2. コールリッジの詩における光と音の反射と省察
（招待発表）福岡大学教授 園田 暁子

第 3 室（B203）

1. 【発表なし】

- 司会 福岡女子大学教授 長岡 真吾
2. コミュニケーションに見る Oedipa のジェンダー観
——*The Crying of Lot 49* のパラノイアとジェンダー
- 九州大学大学院修士課程 津曲 香星
-

第 4 室 (B204)

- 司会 福岡大学教授 古賀 恵介
1. アフォーダンスによるフレーム規定
——over の従事用法を中心に
- 九州大学大学院修士課程 石垣 恵一
-

- 司会 琉球大学教授 石原 昌英
2. 「位置関数理論」における位置関数の同時起動について
- 福岡大学大学院博士課程前期 富岡 美穂
-

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門「イギリス文学」(C221)

詩と革新

- | | | |
|-------|----------|-------|
| 司会・講師 | 福岡教育大学教授 | 後藤 美映 |
| 講師 | 茨城大学教授 | 小林 英美 |
| 講師 | 九州大学准教授 | 武田 利勝 |
| 講師 | 九州大学助教 | 浜本 裕美 |
-

第 2 部門「アメリカ文学」(C222)

反都市化から読み解くアメリカ文学

- | | | |
|-------|------------|-------|
| 司会・講師 | 福岡教育大学教授 | 江頭 理江 |
| 講師 | 福岡大学准教授 | 高橋美知子 |
| 講師 | 佐賀大学教授 | 早瀬 博範 |
| 講師 | 東京工業大学名誉教授 | 上西 哲雄 |
-

第 3 部門「英語学」(B203)

談話標識研究へのアプローチ

- | | | |
|-------|---------|-------|
| 司会・講師 | 九州大学教授 | 大津 隆広 |
| 講師 | 九州大学准教授 | 内田 諭 |
| 講師 | 九州大学助教 | 土屋 智行 |
| 講師 | 九州大学准教授 | 横森 大輔 |
| 講師 | 龍谷大学教授 | 東森 勲 |
-

懇親会 (18 時 30 分～20 時 30 分)

場所 九州共立大学 自由ヶ丘会館 1 階 学生食堂 (会費 5,000 円 学生 3,000 円)

第2日 10月21日(日)

(受付は9時20分より弘明館1階エントランスにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

シンポジウム(10時45分～13時15分)

第1部門「イギリス文学」(B204)

バラッド文化の継承とその可能性

——19世紀以降におけるブロードサイド・バラッドとその文化的定義の広がり——

司会・講師	九州女子大学教授	中島 久代
講師	東京農業大学非常勤講師	鎌田 明子
講師	帝京大学福岡医療技術学部准教授	三木菜緒美
講師	筑紫女学園大学准教授	宮原 牧子

研究発表(①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第1室(C221)

- | | | | |
|-------|--|-------------|-------|
| | 司会 | 西南学院大学教授 | 三宅 敦子 |
| 1. | <i>A Tale of Two Cities</i> に見る物語化される情報と群衆形成
——19世紀の Special Correspondents をめぐって | | |
| | | 九州工業大学非常勤講師 | 原田 昂 |
| <hr/> | | | |
| | 司会 | 北九州市立大学准教授 | 齊藤 園子 |
| 2. | 自己の内面の“a little private plot”への鍵
——Henry James の <i>Roderick Hudson</i> に描かれる葛藤 | | |
| | | 九州大学大学院修士課程 | 川村 真央 |
| <hr/> | | | |
| | 司会 | 福岡大学教授 | 光富 省吾 |
| 3. | 潔癖なロマンス
—— <i>The Sun Also Rises</i> に見る Hemingway の旧価値観 | | |
| | | 九州大学大学院修士課程 | 霜田 桃子 |
| <hr/> | | | |
| | 司会 | 九州大学教授 | 高橋 勤 |
| 4. | Cather と失われた青春の記憶—— <i>Lucy Gayheart</i> 考察 | | |
| | | 九州産業大学教授 | 志水 智子 |
| <hr/> | | | |
| | 司会 | 佐賀大学教授 | 早瀬 博範 |
| 5. | 『八月の光』におけるテクノロジー
——ジョー・クリスマスとリーナ・グローヴが見たオルターモダニティの萌芽 | | |
| | (招待発表) | 西南学院大学教授 | 藤野 功一 |

第2室 (C222)

1. 【発表なし】

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

2. CP phase に関する研究——Phase Candidate 分析

九州大学大学院修士課程 阿部慎太郎

3. (非)等位構造における右方節点繰り上げと空所化

九州大学大学院修士課程 臼井 悠香

4. *that*-痕跡効果に対する最適性理論からのアプローチ ——副詞効果と Anti-*that*-t effect をめぐって——

司会 九州工業大学准教授 前田 雅子

九州大学専門研究員 山本 将司

5. 伝達動詞の歴史的現在——日英語の対照研究——

司会 九州工業大学名誉教授 田吹 昌俊

(招待発表) 九州大学教授 松村 瑞子

特別講演 14 時 00 分より (50 周年記念ホール(C223))

司会 鹿児島国際大学教授 小林 潤司

東京大学文学部教授 阿 部 公 彦

「注意散漫」で読むイギリス小説

——『ハワーズ・エンド』に「らくがき」するとわかること

閉会式 15 時 30 分より (50 周年記念ホール (C223))

挨拶

九州共立大学准教授 黒木 隆善

〈第1日〉10月20日(土)

研 究 発 表

第 1 室 (C221)

司会 北九州市立大学教授 田部井 世志子

1. 『指輪物語』最後の戦いに描かれる旧約の世界

福岡大学非常勤講師 島居 佳江

J.R.R. トールキンの『指輪物語』では、指輪の破棄という共通目的を掲げながらも、旅の仲間たちは三つのグループに分かれ、それぞれがその状況に応じて様々な戦いに巻き込まれて行く。トールキンは、アウグスティヌスの『神の国』や、アキナスの『神学大全』などの神学的伝統を踏襲しており、正戦、聖戦の概念を基に、指輪破棄の戦いに大義名分と正当性を与えていると考えられる。

一方、絶体絶命のクライマックスに、ほとんど不可能なミッションを成し遂げたホビットたちには、待ち焦がれた故郷ホビット庄に帰還した後、別の戦いが待っていた。物語が大団円に収まりつつある時に起こる旅の最後の戦いは正戦の条件に欠けており、そしてホビットのフロドたちはあっさりと勝利する。映画版では削除されたこの戦いを、トールキンはなぜ入れる必要があったのか。本論では、トールキンが描き出そうとしたもう一つの旧約の世界を、この最後の戦いを通して検証していく。

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

2. Ishiguro 文学における老いの表象 ——近年の作品を中心に

山口大学教授 池園 宏

Kazuo Ishiguro は老人を描くことの多い小説家である。このようなイメージを読者が少なからず抱くとすれば、それは彼の名声を高めたブッカー賞受賞作 *The Remains of the Day* (1989) をはじめとする初期の作品群の影響によるところが大きいだろう。老人の設定は Ishiguro 文学の特徴である記憶への関心と結びついている。第二次世界大戦を背景とした時代のパラダイムシフトに翻弄され、その中で過去の記憶に拘泥する人間像を描き出すにあたり、老いた人間や老いへ向かう人間の設定は効果的に機能していた。

だが、Ishiguro によれば、類似した主題を内包するこれら初期作品の執筆の後、自身の加齢とともに人生に対する考えに変化が生じたという。それに応じて、彼の視線の対象は子どもや若者に移行していく。*When We Were Orphans* (2000) や *Never Let Me Go* (2005) はその例で、確かに両作品では主人公たちの子ども時代が前景化されている。その一方で、最新作の *The Buried Giant* (2015) では、あたかも先祖返りしたかのよう、老年夫婦が主人公として設定されている。本発表では、主として今世紀に出版さ

れたこれら後期の作品に焦点を当て、近年の Ishiguro が老いをどのように提示しているのかという視点から考察を試みたい。

第 2 室 (C222)

司会 福岡大学外国語講師 濱 奈々恵

1. 忍耐とバランスの主人公 ——*Persuasion* に見る、情念に向き合い続ける意志

九州大学大学院修士課程 福永 綾

Persuasion (1818) は、ヴィクトリア朝時代のイギリスにおける女主人公の成長と結婚の問題を描いた Jane Austen が、最後に完成させた長編小説である。准男爵家の次女であるアン・エリオットは、19歳の時に海軍将校ウェントワースと婚約するが、身分の違いなどを心配した母親代わりのラッセル夫人に説得されて、その婚約を破棄する。この作品の語りは、ウェントワースとの恋が破れた8年後、つまりアンが27歳の時点から始まる。アンが、オースティンの他の作品には見られない8年という時間の流れを背負ったヒロインであることは、これまでも多くの研究者によって注目されてきたが、アンの自分自身の情念に対する向き合い方を論じた研究は少ないように思われる。そこで本発表では、並外れた忍耐力とバランス感覚というアンの特徴に注目しながら、時間という強大な力によって弱められたように見えながら、その実捨て去ることのできない恋心という自身の情念と向き合い続けた人物として彼女を位置づけ、本作の主人公アンが情念の葛藤を諦めまいとする揺るぎない意志を有するヒロインであることを明らかにしたい。

司会 熊本県立大学教授 虹林 慶

2. コールリッジの詩における光と音の反射と省察

福岡大学教授 園田 暁子

“Reflection”という語には、光や音の「反射」という意味と「省察」という意味があるが、後期の作品『省察への導き(*Aids to Reflection*)』によると、コールリッジは「省察」という行為を、神から放たれた光を、霊的な洞察力を持つ目、すなわち理性によって受け止め「反射」する行為であるととらえていたことがわかる。また、17世紀の司教ロバート・レイトンの言葉に共鳴したコールリッジが、レイトンのアフォリズムにコメントをつけ、読者を省察へと導くことを目的として編まれた本書は、言葉が共鳴し、反射しあうことで成立しているとみることにもできる。このように、光と言葉の反射は、省察にとって不可欠とも言えるプロセスであった。

このことをふまえてコールリッジの詩に目を向けると、「エオリアン・ハーブ」『老水夫の歌』をはじめとする作品には、そのクライマックスとも言える場面において、渾然一体となった光と音が反射しているかのように行き交う様子が描かれている。本

論では、『省察への導き』において明らかにされた省察のあるべき姿が、すでにその執筆の30年近くも前に書かれた詩において描かれていることに着目し、詩の再解釈を試みる。

第 3 室 (B203)

1. 【発表なし】

司会 福岡女子大学教授 長岡 真吾

2. コミュニケーションに見る Oedipa のジェンダー観 ——*The Crying of Lot 49* のパラノイアとジェンダー

九州大学大学院修士課程 津曲 香星

Thomas Pynchon (1937-) による *The Crying of Lot 49* (1966) は主人公 Oedipa Maas がアメリカの郵便ネットワークに対抗していると思われる Tristero の謎を追究する物語だが、真相は謎のまま幕を閉じる。先行研究において、推理小説の形式はパスティーシュに過ぎず、Oedipa は無機質な人物であると評される。しかし Megger との行為をきっかけに Tristero の謎に導かれたと言う Oedipa の境遇は Remedios Varo (1908-1963) の *Embodying Earth's Mantle* (1961) と酷似する。男性が女性を導くという構図を、本作の大きなテーマの一つであるコミュニケーションを鍵に構造化することで、Oedipa のジェンダー観が明確化されると思われる。本発表では、Oedipa のパラノイアが構築する世界で与えられた男女のコミュニケーションの「向き」に目を向ける。無機質な語り手 Oedipa のジェンダー観を読者が知ること、男女それぞれに「向き」が与えられたと考え、その境界を超えられない Oedipa のジレンマの物語として、ロマンス的な読みを可能にする事を目的とする。

第 4 室 (B204)

司会 福岡大学教授 古賀 恵介

1. アフォーダンスによるフレーム規定 ——over の従事用法を中心に

九州大学大学院修士課程 石垣 恵一

本発表はアフォーダンスの概念に着目し、フレーム意味論におけるフレーム規定にはアフォーダンスが有効であることを論じていく。まずは (1) のような従事用法に焦点を当て、Brugman (1988) とフレーム意味論では捉えきれない (2) をアフォーダンスを用いて考察していく。

- | | | |
|-----|--|----------------|
| (1) | We talked over lunch | (Brugman 1988) |
| (2) | “You see, Watson,” he explained in the early hours of the morning as we sat over a glass of whisky and soda in Baker Street, ... | (Doyle 1892) |

フレーム意味論の観点から従事用法の動詞には発話フレームが関係していることが分かっているが、(2) を見てみると、「座る」という行為は一見すると発話とは何の関係もないように思える。しかしその行為の可能性に目を向けると、人は休憩のために座り、昼食を取りながら話をするということが可能である。つまり動詞 sit は会話行為や飲食行為をアフォードすると捉えることが可能であり、発話フレームを持っているため、(2) は容認される。

アフォーダンスの導入によりフレーム規定がより詳細になり、従事用法の容認判断が一步前進するであろう。

司会 琉球大学教授 石原 昌英

2. 「位置関数理論」における位置関数の同時起動について

福岡大学大学院博士課程前期 富岡 美穂

本発表では、英語の語の強勢配置を説明するために提案された「位置関数理論」(Yamada (2010)) の問題点の一部を指摘し、その解決策を提案する。位置関数理論における副次強勢規則は、16 個の「位置関数」(Positional Function) から構成され、それぞれの関数はそれぞれの起動条件が満たされた音節において起動される。故に、語の強勢配置は、それらの起動結果を計算・集積したものとなる。Yamada (2010) は、これらの位置関数の起動に関して、基本的には順序関係は存在せず、「同時に」起動・適用されるとしている。しかし、裸核 (bare-nucleus) 音節に関わる一部の位置関数の間には起動に順序関係が存在するという指摘もなされている。本発表では、これらの位置関数の起動に際して、順序を想定する必要があるのかについて *icosahedron* や *Epaminondas* などの語を用いて考察を行い、位置関数理論においては、位置関数間に起動の順序づけを想定する必要はないことを示す。

シンポジウム

第 1 部門「イギリス文学」(C221)

詩と革新

司会・講師 福岡教育大学教授
講師 茨城大学教授
講師 九州大学准教授
講師 九州大学助教

後藤 美映
小林 英美
武田 利勝
浜本 裕美

本シンポジウムでは、18 世紀末から 19 世紀中葉までの時代における、詩とその革新性について様々な観点から考察を行う。フランス革命や産業革命を経るこの時代を、歴史学者ホブズボームは、革命の波及する時代と捉えている。言い換えれば、この時代は、長い 19 世紀の先駆けとして、歴史的、思想史的な流れの上で、変化を画する時

代であったともいえる。例えばこの時代は、解剖学、生理学等の医科学が発展を遂げ、第二次科学革命と呼ばれる新たなる知識と理論の興隆をみる時代でもあった。またイギリスでは、文芸批評誌が台頭し、時代の精神性を照射する思想の形成に与する文化的装置として機能しはじめる時代でもあった。あるいは、同時代のドイツにおいても、イギリス・ロマン主義の言語的、理論的マニフェストとなる、『リリカル・バラッズ』が刊行された 1798 年に、シュレーゲル兄弟によって雑誌『アテネウム』が刊行され、ドイツ・ロマン主義の詩学的、美学的理論が構築される時代でもあった。こうした時代の革新的流れに棹さすように、19 世紀中葉には、詩が、文化的政治的な思想の形成を担う一つの革新的な力であることを再認識させる、ロマン派の思想を継承するバレット・ブラウニングのような詩人が登場する。こうした時代背景をもとに、詩とそれが担う革新性について、具体的に考察を行う予定である。

身体の詩学と革新性

——ジョン・キーツの詩における詩的昇華／消化の美学

後藤 美映

自身が所有する、ジョン・ミルトンの『パラダイス・ロスト』の欄外に、キーツはミルトンの創造性について「翼で飛びながら美を捉え、食らいつき、飲み込み、本質的な詩を生み出す」と書き込んでいる。キーツのミルトンに対する賞賛は、美を「味わい尽くす」哲学的思考とその慧眼にあるが、さらに動物捕食の行為にも喩えられる身体的創造性にある。この賞賛は、身体の捨象による抽象化の末に見出される、有名なミルトンの崇高の美学に、身体的な創造性をこそ見出すキーツ自身の創造性を浮き彫りにしているともいえる。「目で（太陽の光を）飲み尽くした末に、デルポイの神の痛みを脳に感じる」としたキーツの詩行にみる創造性の核は、その身体的イメージであると考えられる。

本発表では、19 世紀初頭の医科学の興隆や美学的思想の変遷を通して、キーツの詩作における身体的イメージを中心に考察する。外界の事物や古代の神話が感受され、詩人の想像力によって「昇華」されて立ち上げられる詩的イメージに、残滓として残る、「消化」不良ともいえる身体性を、詩の近代的な革新性として論じる。

文芸批評と文学の革新性

——ジェフリーとウィルソンと英国ロマン主義時代の詩人

小林 英美

19 世紀初頭英国の定期刊行物の文芸批評は、作品の芸術的価値だけでなく、その革新性とその意義が問われる場でもあった。『クォーターリー・レビュー』、『エディンバラ・レビュー』そして『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』等の登場によって、政治から芸術に至る広域を論じる新しい評論誌の時代が開かれたが、その文芸批評はまだ成熟したものではなく、その論調には保守的傾向が概して認められた。それは評論家個人の文学的才能・嗜好だけでなく、出版社の政治的立場や、読者層に起因するが、その保守的な論評を考察することは、攻撃対象になった詩人・作品の革新性とその意

義を、結果的にあぶり出すことになるだろう。本発表では上掲誌を代表する評論家フランス・ジェフリーとジョン・ウィルソンによるロマン派時代の詩人（ワーズワスや女性詩人）についての批評をその事例として取り上げる。

ポエジーの言語、あるいはリズムの本質 ——アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルにおける〈芸術の自然史〉——

武田 利勝

カントがその批判哲学によって人間の世界認識のあり方にもたらしたコペルニクスの転回は、17世紀にオーピッツが立ち上げてから連綿と受け継がれてきたドイツ詩学にも、いつしか絶大な影響を与えることとなった。すなわち詩的言語の規範性を客観的所与として受け入れることはもはや独断論以外のなにものでもない。詩の言語に規範があるべきだとすれば、それは言語そのものの、ひいては人間自身の内的必然性由来するのではなくてはならない——これが、批判哲学以降に模索された芸術をめぐる観念論の核心である。

のちにシェイクスピアのドイツ語訳、また『劇芸術と劇文学についての講義』等を通じてヨーロッパ中にその名を馳せることになるアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの思想的出発点もまた、こうした詩学的な「カント危機」との格闘のうちにあった。本報告では、精神と身体、芸術と自然といった問題を軸として、おそらくは收拾不可能となるであろうこの美学的格闘の一端を御紹介する予定である。

告発する dramatic monologue ——バレット・ブラウニングと子供を葬る逃亡奴隷

浜本 裕美

本発表では、Elizabeth Barrett Browning ‘The Runaway Slave at Pilgrim's Point’ (1847) に焦点を当てる。アメリカの奴隷制廃止運動の雑誌 *Liberty Bell* に掲載され、後に自己編纂の *Poems* (1850-6) に収録された作品である。イギリス領における奴隷制は1833年に廃止が決定されたが、この詩には、詩人の家族がジャマイカの入植者であることの反映が見られる。奴隷とされた黒人女性が語り手であり、逃亡した後、白人による陵辱の結果生まれた息子を殺して大地に埋めたことを語る。この詩は、奴隷制廃止を訴える詩の系譜や、大西洋を跨ぐ奴隷の語りの系譜に加え、1830年代以降興隆した革新的な詩のジャンル **dramatic monologue** の系譜に連なる。ハンナ・モアやフレデリック・ダグラスの作品を参照することで、詩人の独自性を探りつつ、ジャンルの選択がこの詩にもたらした効果を考察したい。

第2部門「アメリカ文学」(C222)

反都市化から読み解くアメリカ文学

司会・講師	福岡教育大学教授	江頭 理江
講師	福岡大学准教授	高橋美知子
講師	佐賀大学教授	早瀬 博範
講師	東京工業大学名誉教授	上西 哲雄

アメリカ文学において、都市は重要な役割を果たしてきた。特に都市が急速に発展した19世紀半ば以降のアメリカにおいて、都市は作家の想像力を刺激し、都市をテーマとする多くの作品が生み出された。夢の実現の場としての都市、スラム化し空洞化した都市の実状、都市への失望と郊外への憧れ、インターネットの発展による都市的空間の広がり。社会の変化の中で、アメリカ作家が扱う都市に纏わるテーマもまた変化したのである。

本シンポジウムは、特に「反都市化」をテーマとした。都市へと向かうベクトルを逆の形で配置した時、アメリカ文学における都市と人との関わりは、新たな形で読み解けるのではないだろうか。内容はおおまかに以下の形で構成する。「そもそも反都市化とは？」の議論はもちろんのこと、フロアのみなさんとの活発な議論を期待するものである。

- (1) 都市小説の原点
- (2) 都市への幻滅
- (3) サバービアの様相
- (4) 都市の無化

19世紀都市小説の原点

江頭 理江

19世紀後半のアメリカにおいては、社会の急速な産業主義化により、大都市が相次いで出現した。都市への人口の流入も激しく、例えばニューヨークの人口は、1830年に23万6千人程であったものが、1900年には337万1千人余りと実に10倍以上に膨れ上がったという。世紀末のニューヨークには多くのスラムが出現し、窓もないテネメント（棟割長屋）に住む住民の数は、実にニューヨーク市全体の4分の3に達した。フロンティア消滅後のアメリカンドリームの実現は、都市化に取って変わられたとする考えがあるが、世紀末における都市の実状は、夢とは程遠い惨状を示していたのである。

アメリカにおける都市文学の成立は19世紀末と考えられるが、都市小説の特徴を探ることが、このシンポジウムにおいてまずは必要なことであろう。W・D・ハウエルズの『新しい運命の浮沈』（1890）、ステイブン・クレインの『街の女マギー』（1893）、セオドア・ドライサーの『シスター・キャリー』（1900）を手掛かりとする予定である。

ウィルソン夫妻と灰の谷 ——都市と郊外の狭間を読む——

高橋 美知子

スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(1925)における地理は、イースト・エッグとウエスト・エッグ、東部と(中)西部、そして都市と郊外、という二項対立の構図を基本として表出されている。都市と郊外という構図の背景には、1920年代に大きく進んだ郊外化現象があるが、本発表では、郊外化のダイナミズムの中で都市(マンハッタン)と郊外(イースト／ウエスト・エッグ)の狭間に生まれた特異な一帯、「灰の谷」とその住人に注目する。

“Among Ash Heaps and Millionaires”と呼ばれていたこともあるこの作品において、「灰の谷」の住人ウィルソン夫妻は、それぞれ物語の行方を決定的に方向付けるキーパーソンであるが、『ギャツビー』をめぐる議論の中で、二人の存在は周縁化されてきた。華やかなアンチヒーロー、ギャツビーの影に隠れがちなウィルソン夫妻の物語に注目しながら、『ギャツビー』を読み直してみたい。

大量生産品としての「家族」：サバービアの陰鬱

早瀬 博範

喧騒と不潔な都会から抜け出し郊外での生活を求める傾向は、50年代に急激に高まる。若い服役軍人の結婚ラッシュによる圧倒的な住宅不足への対応策として、さらには未曾有の好景気による中産階級の郊外志向の高まりもあり、郊外の住宅開発は国策レベルで推し進められた。そしてこの傾向をテレビが煽った。「パパはなんでも知っている」などの数多くのホームドラマが、理想のアメリカンファミリー像を国民に植え付けた。これらが国策レベルで行われた背景には冷戦がある。不安な国民の目を家庭に向かわせ、その豊かな生活をアメリカンライフとして誇示する必要があった。

このようにして、「家族」という商品は郊外に大量生産された。大量生産品として作られた空間はコミュニティー意識も低く、画一的で排他的である。そこでは疎外感、閉塞感、虚無感が渦巻いている。T. S. エリオットは、「うつろな人々」が住む都会を“Unreal City”(『荒地』1922)と呼んだが、50年代の郊外も同様の形容が当てはまるのではないか。この unreal な状況を当時の作家たちはどのように描いたのか。アップダイクの『走れ、うさぎ』(1960)、ジョン・チーヴァーの「泳ぐひと」(1964)などの「サバービアもの」、さらにはオーツの「どこへ行く、どこへ行った」(1964)なども視野に入れ考察する。

ポストモダン小説における都市空間 ——デリーロ、オースターそして SF——

上西 哲雄

都市の変容の歴史はメディアの発展と密接にからみながら進んできた。新聞・雑誌、ラジオ、テレビの発展は、郊外化や郊外の自立した文化の形成に欠くことができ

ない。そのメディアの発展の流れには、都市性（urbanity）が物理的空間の区別なくメディアにつながる人々の心により深く浸透していくというベクトルが、間違いなく存在する。その行きつく先とも言えるインターネットは、物理的空間よりもリアリティのある仮想空間をもたらし、都市中心部とか郊外とかいった物理的空間の差を無化する方向に向かう。こうした状況をアメリカ小説はどのように記述しようとしているのか。SF 映画を補助線にしつつ、ドン・デリーロの『ホワイト・ノイズ』（1985）、ポール・オースターのニューヨーク 3 部作すなわち『ガラスの街』（1985）、『幽霊たち』（1986）、『鍵のかかった部屋』（1986）などを手掛かりに、アメリカ文学における新しい都市像の一端に触れることを目指す。

第 3 部門「英語学」(B203)

談話標識研究へのアプローチ

司会・講師	九州大学教授	大津 隆広
講師	九州大学准教授	内田 諭
講師	九州大学助教	土屋 智行
講師	九州大学准教授	横森 大輔
講師	龍谷大学教授	東森 勲

談話標識 (discourse marker) とは、さまざまな統語的カテゴリーからなり、文の真偽条件には貢献しない連結表現の集合体である (Fraser 1990, 1999)。研究者自身の母語を分析対象とすることも多く、また、but, so, in fact, in other words など、これまで談話標識と呼ばれていたものから、I mean, you know, like などの filler (つなぎ言葉) や hey, look などの間投詞表現、接続詞的表現を含めることも可能であり、言語表現の談話標識化としての側面も考えると、研究対象は多岐にわたる。さらに、分析の枠組みに関しても、意味論のみならず、会話分析、コーパス言語学、認知語用論、歴史語用論など多分野におよび、とりわけ語用論研究では重要な研究対象と位置づけられている。このシンポジウムでは、談話標識研究へのさまざまなアプローチを議論し、それぞれの枠組みが目指すものを明確にすることで、談話標識研究の現在を考えたい。

対照を表す接続語について ——フレーム意味論からのアプローチ

内田 諭

接続語はその非真理条件的な性質から意味記述の対象としては周辺の位置づけであったが、昨今ではその多機能性が注目され、学際的な関心を集めている。例えば、関連性理論では手続き的意味を表す言語アイテムとして注目され、認知的に妥当性が高い意味記述の研究が進められている。しかしながら、接続語そのものの意味（機能）についての議論にとどまり、接続語が具体的に何を接続しているか（つまり接続語の前

件と後件にどのような意味内容が表出するか) については、関連性理論のアプローチ以外においても未解明のままである。本発表では、フレーム意味論に基づくことで、接続語の意味を具体化できることを示し、前件と後件それぞれに喚起されたフレームの組み合わせによって、接続語の意味記述を試みる。具体例として対照の意味を表す接続語を取り上げ、前件と後件のフレームの同一性が対照の意味の特徴であることを論じる。

文頭に出現する MWE の談話標識らしさ

土屋 智行

Multi-word expression (MWE) は、複合語やイディオムを典型的な現象として、その特徴と分析手法の提案が Sag et al. (2002) でなされており、また、自然言語処理の領域でも積極的に取り扱われてきたトピックの 1 つである。MWE の意味や機能的特徴の分析は盛んに進められており、現在は、コーパスを利用して、特定の談話的機能を持つ MWE を抽出する研究 (Nesi and Basturkmen 2006) もある。談話標識は、文または発話の冒頭に出現しやすいという特徴を持つが、文頭に出現する MWE がどれだけ談話的機能を持つのかを明らかにできれば、両者の関係の精緻化も期待できる。本発表では、文頭に出現する表現をコーパスから網羅的に抽出し、頻出する MWE のうち、談話的機能を持つものがどれだけの割合を占めているのかを分析する。同時に、談話的機能を持つ文頭の表現について、形態素数や品詞の傾向等の観点から検討し、MWE との関連性を考察する。

談話標識への会話分析的アプローチ ——情報を受けとめる really を中心に

横森 大輔

会話の中である参加者が何らかの情報を伝えと、他の参加者は様々な方法でその情報の受けとめ (information receipt) を表出する。会話分析の分野において、情報の受けとめに関する研究として最もよく知られている Heritage (1984) では、英語の oh が、単に話し手の特定の認知状態 (例: 驚き) によって生み出されるものではなく、参加者が直面している相互行為上の課題への対処として用いられていることを示している。本発表では、英語会話において高頻度で用いられる談話標識の 1 つ (Jucker & Smith, 1998:176-178) である really の電話会話コーパスでの用例を分析し、談話標識への会話分析的アプローチの例を示す。特に、上昇調の really? を oh や wow など他の談話標識と共に記述した Thompson et al. (2015) の成果を発展させ、そこで扱われていない下降調の really を含めた包括的記述を行う。

In Other Words と *I Mean* ——関連性理論の立場から

大津 隆広

談話標識 *in other words* と *I mean* は先行発話の言い換え (*restatement*) という談話機能をもち、両者はともに *replacement repair* を含む類似の談話機能に貢献すると考えられている (Schiffrin 1987: 302)。実際に、両者の「言い換え」は談話において結論、理由づけ、明確化などの重複した機能をもち、明確に意味の区別が行われているとは言えない。類似の談話標識の意味は、(i) 「言い換え」のような結束性カテゴリー (*coherence category*) ではなく、手続き的制約 (*procedural constraint*) により区別ができること (Blakemore 2002: 170, 2004: 235)、(ii) 談話において多機能的であっても、一義的に定義ができること (手続きの意味は多義にはならないこと) (Carston 2016: 161)、こうした関連性理論の主張をもとに、*in other words* と *I mean* の意味の区別を試みたい。

歴史語用論から見た談話標識の分析

東森 勲

本発表では、英語談話標識を歴史的な「認知語用論」により分析する。概念的意味から談話における計算方法を示す手続きの意味としての通時的な変化 (文法化) を考察する (Cf. Nicolle 1998)。通例、歴史語用論は高田ほか (2018) 小野寺 (2014) などでは、歴史的な「社会語用論」の立場とし歴史的に談話標識の分析を試みている。具体例として *well*—Traugott & Dasher (2002), Lutzky (2012), Jucker (1993), Schourup (2001), 堀ほか (2009), *but/nevertheless/still*—Blakemore (2002), 岩井 (2017), *in other words*—Milagros & Rubio (2007), *like*—Andersen (1998), 談話標識の連続パターン—Fraser (2015), 大津 (2017) などを検討する。

〈第2日〉10月21日 (日)

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(B204)

バラッド文化の継承とその可能性

——19世紀以降におけるブロードサイド・バラッドとその文化的定義の広がり——

司会・講師	九州女子大学教授	中島 久代
講師	東京農業大学非常勤講師	鎌田 明子
講師	帝京大学福岡医療技術学部准教授	三木菜緒美
講師	筑紫女学園大学准教授	宮原 牧子

口承歌であったバラッドが活字文化に取り込まれて以降、バラッドには様々な性質が付加された。本シンポジウムでは、題材を 19 世紀以降現代までの「ブロードサイド・バラッド」に取り、バラッドはどのように継承されてきたか、同時に、その文化的定義がどのような広がりを見せているかについて議論する。ブロードサイド・バラッドとはブロードシート（片面刷りの大判紙）に印刷されたバラッドを指し、新聞に先駆けてジャーナリスティックな役割を担っていたため、民衆にとって政治や時事問題を知る貴重な情報源であった。そのジャーナリスティックな視線を、詩人や画家たちはどのように作品に取り込んでいるか、ジャーナリスティックな性質はバラッドにどのような広がりを与えたかを、Thomas Hood、Jack B. Yeats、Lafcadio Hearn、Georges Bigot、William Plomer、John Betjeman の作品を取り上げ議論する。

ブロードサイド・バラッドとしての *The Dream of Eugene Aram, the Murderer*

鎌田 明子

Thomas Hood は 1829 年に *The Dream of Eugene Aram, the Murderer* を発表した。教養ある青年アラムが殺人の罪で逮捕され、裁判の席ではその自己弁護が裁判官までも圧倒し、世間の注目を集めた。この事件を題材としたフッドのバラッド詩や Bulwer-Lytton の小説 *Eugene Aram* (1832) は人気を博したが、同一の事件を題材にしながら、これら二つの作品の内容は全く異なっている。フッドは小説やその元となった裁判記録では語られることのないアラムの根源的な罪の意識と恐怖を描いている。そこにはコミュニティの解体に伴い、失われつつあった共同体で共有されていたある種の“common sense”を留めようとしたフッドの意図が見られる。本発表では、アラム事件の裁判記録、リットンの小説、フッドの作品の差異を分析することにより当時のブロードサイド・バラッドが担っていた働きを考察する。

Jack B. Yeats の *A Broadside*

三木菜緒美

Jack B. Yeats は、アイルランドを代表する画家として有名であるが、その人生において 11 年もの長きにわたりブロードサイドの企画・出版に携わっている。1902 年から 2 年間、出版社 Elkin Mathews から 300 部限定で月に 1 度 *A Broad Sheet* を出版。片面刷りの大判紙に、伝承バラッドやソング、そして同時代の詩人の詩をイラストとともに掲載し、伝統的ブロードサイドのスタイルを踏襲した。1908 年からは 7 年間、ダブリンの出版社 Cuala Press から *A Broadside* を出版。4 ページ構成で、アイルランドの伝承バラッドや現代詩を中心に詩を 2 編掲載し、全てにおいてジャックのイラストが付けられており、その多くは労働者の生活や娯楽、海賊を題材とし、詩がアイルランド的であるのに対して、イラストはアイルランド的でないものが目立つ。本発表では、この *A Broadside* に焦点を当て、作品の特徴や背景について考察を行う。

日本発のバラッド風文化

宮原 牧子

明治時代、Lafcadio Hearn と Georges Bigot はジャーナリストの視点で日本の文化を西洋に発信するとともに、日本におけるバラッド受容に大きな役割を果たした。ハーンが東京帝国大学文学部で行った英文学の講義は日本におけるバラッド研究の礎となった一方、ハーンが著した散文作品には、形式こそ違え、バラッドの要素が多々見られる。ビゴーは居留地に住む外国人や欧州に向けて、日本の風習や文化、またそれらが急激に西洋化していく様子をえがいた。1892 年ごろ発表されたと言われている *Yokohama Ballads* は、風刺画に英語の詩が付されたものであり、ブロードサイド・バラッドを彷彿とさせる。ビゴーが英語で言葉を付した作品は他に例がない。本発表ではハーンとビゴーを中心に日本発のバラッド風文化の中に見られるジャーナリスティックな側面について検証する。

現代版ブロードサイドとしての Plomer と Betjeman のバラッド詩

中島 久代

20 世紀の詩人 William Plomer は共同体感覚を喪失した社会で物質的な利害のみで繋がっているストレンジャーとして現代人を捉え、恐怖と不条理から成り立つ日常をバラッドのスタイルで描くことで、その不条理を同時代の読者と共有した。他方、中産階級の生活の諸相を題材とすることを好んだ John Betjeman は、バラッドの特色である物語性と客観性に、感情を完全に廃したストーリーと素朴なリズムを組み合わせ、ウィットに富み、都会的、風刺的である一方、その底に、メランコリー、恐怖、宗教性などをしのばせた作品を書き、現代社会のアイロニーを読者と共有した。本発表では、プルーマーの “The Murder on the Downs” (1936)、ベッチェマンの “Death in Leamington” (1932) と “A Subaltern’s Love-song” (1945) などの作品から、不条理やアイロニーをテーマとした 20 世紀のバラッド詩を現代版ブロードサイド・バラッドとして考察する。

研 究 発 表

第 1 室 (C221)

司会 西南学院大学教授 三宅 敦子

1. *A Tale of Two Cities* に見る物語化される情報と群衆形成 ——19 世紀の Special Correspondents をめぐって

九州工業大学非常勤講師 原田 昂

Charles Dickens は、*Barnaby Rudge* において 18 世紀の事件を基に、明確な中心をもたず些細なききっかけで突如として暴徒化する群衆を描いた。その 18 年後、Dickens は

A Tale of Two Cities において再び、18 世紀のフランス革命を舞台として群衆とその暴力を描いている。しかし本作品は、市民たちが情報を交換し合う Defarge の酒場が明確に群衆の形成要因となっている点で、*Barnaby Rudge* とは大きく異なっている。ただし、市民同士の情報交換よりも一部の人物によって物語化される情報がより大きな意味をもつ点に注目しなければならない。この作品が書かれた 1850 年代は、ジャーナリズムの分野において特派員が重要な位置を占めた時代である。彼らが遠隔地で見聞きした情報を語ることで、この時代新聞は真のマスメディアとなった。本発表は、*A Tale of Two Cities* において語られる情報と群衆形成を、現実世界において特派員たちが語る情報と読者の関係に重ね合わせることで、19 世紀のメディアに対する作家の意識を読み解くものである。

司会 北九州市立大学准教授 齊藤 園子

2. 自己の内面の “a little private plot” への鍵 ——Henry James の *Roderick Hudson* に描かれる葛藤

九州大学大学院修士課程 川村 真央

最初期の長編作品である『ロデリック・ハドソン』(1875) の主題についてヘンリー・ジェイムズは、作品がローランドの視点で進行するという意味で、一見すると物語の中心であるように思われるロデリックではなく、ローランドの意識の重要性を述べている。

先行研究においても、ローランドに焦点を当てたものが多く見られる。なかでもロデリックとの関係は、最も関心が集まる点だと言えるだろう。ローランドがロデリックのことを不自然なほど気にかけ、親愛の情をもって世話をするというこの両者の関係は、ロデリックに対するローランドのホモセクシュアルな願望の表れだとされている。

本発表では両者の関係についてのさらなる考察を試みる。厳しい教育を受けて育ったことと、父に従う母の忍耐強さを認識したことは、ローランドに大きな影響を与えていると考えられる。これを始点としてローランドの理想を体現する分身としてのロデリックの姿を示すことで、ローランドの内面における自己の葛藤の物語として読むという、ホモセクシュアルとは異なる観点からの解釈を提示したい。

司会 福岡大学教授 光富 省吾

3. 潔癖なロマンス ——*The Sun Also Rises* に見る Hemingway の旧価値観

九州大学大学院修士課程 霜田 桃子

これまでの Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* のセクシャリティ・ジェンダー研究では、中心となる 2 つのテーマが存在した。主人公 Jake Barnes が戦争経験によって負った傷と彼の性的不能についての考察から、Hemingway の男性性に対する態度を明ら

かにしようとした研究と、1920年代に新たな価値観とともに現れた「新しい女性」としての Brett Ashley の描写から、Hemingway の女性に対する態度を考察した研究である。本発表では、*The Sun Also Rises* において Hemingway が描いた、主人公 Jake Barnes と、Brett Ashley の恋愛関係を分析することで、時代と自身の伝記的背景に、新旧二つの価値観が混在した Hemingway の葛藤と、それが大いに反映されたと考えられる、彼の男女関係への理想を考察する。Jake と Brett、二人の関係が、筆者が望むも実現し得えなかった、当時の新しい価値観とは逆行する、旧価値観の清潔な恋愛として描かれていることを明らかにする。

司会 九州大学教授 高橋 勤

4. Cather と失われた青春の記憶 ——Lucy Gayheart 考察

九州産業大学教授 志水 智子

Willa Cather の晩年の作品である *Lucy Gayheart* (1935) において、刹那的な情熱のままに生き、現実の生活力に乏しいヒロイン Lucy の短い人生が描かれる。Lucy には、自ら人生を切り開く、Cather 文学における「開拓者」のようなたくましさはなく、音楽家としても野心や向上心に欠け、その恋愛も将来性が全くない。また、だからといって彼女は *Shadows on the Rock* (1931) における Auclair 父娘のように、与えられた環境や生き方に徹して、堅実に受動的人生を生きるというわけでもない。Cather はなぜ作家としての円熟期かつ晩年に、このような物理的にも精神的にも儚いヒロインを描いたのだろうか。Cather が手首を痛め気力をなくしていた時期の作品ゆえに Lucy の性格にも強さがないと分析する Milton Meltzer のような意見もあるが、本発表では、Lucy を、Cather の青春についての考えを体現する一つの試みとしての人物ととらえ、Lucy の人生によって表現される Cather のメッセージを考察していきたい。人生において成功するために必要な覚悟や夢を捨てる決断力など、Cather や Cather の作品における成功者たちが共有する経験を示唆するとともに、成功者たちが失ったものや断念したものをクローズアップするドラマとしてこの作品をとらえることができる。

司会 佐賀大学教授 早瀬 博範

5. 『八月の光』におけるテクノロジー ——ジョー・クリスマスとリーナ・グローヴが見たオルターモダニティの萌芽

西南学院大学教授 藤野 功一

アメリカ全体が不況に見舞われていたとはいえ、フォークナーが『八月の光』を書き進めていた 1930 年代初頭は、依然としてテクノロジーの進歩が喧伝され、人々にさらなる経済発展の希望を与えていた時代であった。フリッツ・ラングによる映画『月世界の女』の英語版公開と同じ年に、宇宙探索を科学的に論じたディヴィッド・ラサーによる『宇宙征服』(1931) が出版され、他の惑星への植民が論じられるいっぽう、

地上ではアメリカの国土のほとんどの電信柱が立ち並び、電話回線によるネットワークが作り上げられ、電話交換手が女性の就職先としてもはやされた。これらのテクノロジーが明るい可能性とともに喧伝される中、しかし、フォークナーは『八月の光』(1932)の結末で陰部を切り取られた跡から血を吹き出して死につつあるジョー・クリスマスをロケットにたとえ、そして馬車に乗って去りゆくリーナ・グローヴの見つめる先に電信柱を配した。時代を象徴するテクノロジーを小説の中に登場させながらも、フォークナーは人々がみつめていた希望の方向とは違う意味合いをそこに与えたようだ。この発表では、1930年代初頭のテクノロジーの進歩がどのような方向性を持っていたかを確認したのち、『八月の光』においては、これらのテクノロジーを用いた描写が、モダンの別のありよう (altermodernity) の萌芽を示していたことを論じたい。

第 2 室 (C222)

1. 【発表なし】

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

2. CP phase に関する研究——Phase Candidate 分析

九州大学大学院修士課程 阿部 慎太郎

本発表では、CP の phase 性に関して議論する。Grano and Lasnik (以下、G&L) (2016) は束縛代名詞効果を観察し、phase candidate 分析を提案した。具体的には、束縛代名詞は任意に φ 素性が unvalued な状態で派生に加わり、それが TP 指定部に位置していると C の phase 機能が放棄されるというものである。

(1) Gapping

a. *John claims that Mark likes apples and Bill ~~<claims that Mark likes>~~ oranges.

b. ?John₁ claims that he₁ likes apples and Bill₂ ~~<claims that he₂ likes>~~ oranges.

(2) 数量詞繰り上げ

a. At least one professor claims that Bill reads every journal. * $\forall > \exists$

b. **At least one professor**₁ claims that he₁ reads **every journal**. ? $\forall > \exists$

(1a) (2a) では、定形節の CP を越える Gapping と数量詞繰り上げはそれぞれ非文法的となるが、埋め込み節内の主語位置に束縛代名詞を含む (1b) (2b) では、多少の容認性の改善が見られる。

本発表では、G&L の phase candidate 分析を修正し、phase 主要部は phase 候補として派生に加わるが、条件を満たすことによって phase 機能を開始すると提案する。束縛代名詞と同様に、PRO も φ 素性が unvalued な状態で派生に加わるという想定の下、主にコントロール構文の考察を通して上記の提案の妥当性を示す。

3. (非)等位構造における右方節点繰り上げと空所化

九州大学大学院修士課程 臼井 悠香

従来、等位構造に特有であるとされてきた現象に、右方節点繰り上げ (Right Node

Raising) と空所化 (Gapping) がある。これらは、従属節などでは非文法的となる現象であるとされてきた。この特性を説明するため、等位構造にのみ適用できる操作、すなわち全域的 (Across-the-Board) 移動や vP の接続を用いて、これらの現象を分析している研究がある。例えば Sabbagh (2007) は、右方節点繰り上げは共通要素 (pivot) の全域的移動により派生すると分析している。また、Toosarvandani (2013) や Johnson (2014) は、空所化は vP が等位接続された構造において、焦点を受けた要素が移動したのちに VP 削除が適用されることで派生すると分析している。

しかし、これらの現象は実際には、従属節や比較構文などの非等位構造でも生じることがある。上記の研究では、このような例外までとらえることはできない。本発表では、右方節点繰り上げと空所化にそれぞれ派生を二種類想定することにより、これらの現象が (i) 主として等位構造に依存することと、(ii) 例外的に非等位構造で生じることの二つを、同時に説明できることを示す。

司会 九州工業大学准教授 前田 雅子

4. *that*-痕跡効果に対する最適性理論からのアプローチ ——副詞効果と *Anti-that-t effect* をめぐって——

九州大学専門研究員 山本 将司

Chomsky (2013, 2015) がラベリング理論によって ECP と EPP の統一を試みる中で *that*-痕跡効果が説明の対象となっている。しかし、*that*-痕跡効果には補文標識の有無による文法性が逆転する「副詞効果 (Culicover (1993))」や「*Anti-that-t effect* (Bresnan (1972))」という現象が存在し、それらの現象に対してラベリング理論による説明は与えられていない。

本発表は副詞効果や *Anti-that-t effect* を含む *that*-痕跡効果一般に対して最適性理論 (Prince and Smolensky (1993)) に則った説明を与える。即ち、補文標識 *that* の省略に関するいくつかの制約と移動操作を抑制する経済性に関する制約によって可能な統語派生を最適性理論の下で評価した結果として *that*-痕跡効果一般は説明される。

さらに本発表の仮定に従うことで、フランス語に観察される *que-qui* 交代現象 (Rizzi and Shlonsky (2007)) に対しても説明が与えられると主張する。

司会 九州工業大学名誉教授 田吹 昌俊

5. 伝達動詞の歴史的現在 ——日英語の対照研究——

九州大学教授 松村 瑞子

歴史的現在とは過去の出来事をあたかも現在進行しているかのように描くのに用いられた現在形のことであるが、伝統的に劇的效果を生むと言われてきた。Leech (1987:11) は、これとは異なる種類の歴史的現在が伝達動詞に見られるとして以下のような例を挙げる: Joan tells me you're getting a new car. / The ten o'clock news says that

it's going to be cold. Leech (同上) は、これらの動詞の表す伝達内容はそれを受けた人にとってまだ働いているので現在形が許されるとする。この説明は尤もなのであるが、談話中でどれが過去形になり歴史的現在形になるのかについての説明は難しい。更に、この現在・過去の交替について、英語と日本語は必ずしも一致しているわけではない。本発表では、英語と日本語の伝達動詞の時制交替について具体例を分析しながら考察していきたい。

特 別 講 演 (50 周年記念ホール (C223))

司会 鹿児島国際大学教授 小林 潤司

演題 「注意散漫」で読むイギリス小説 ——『ハワーズ・エンド』に「らくがき」するとわかること

講師 東京大学文学部教授 阿部 公彦 (あべ まさひこ)

講演内容

E・M・フォースターの『ハワーズ・エンド』に「らくがき」をしながら読むとどうなるか？ 筆者は最近、「らくがき式読解法」なるものを試みている。その教室での実践例を紹介した上で、同時に、『ハワーズ・エンド』に内在する「注意散漫」についても考察してみたい。

「らくがき式読解法」には「注意散漫」の有効利用という側面があるが、『ハワーズ・エンド』を「らくがき式」で読むと、俄然、作品そのものの「注意散漫」性も目についてくる。いわば、二重の「注意散漫」。これはまったくの偶然なのか。それとも何らかの必然なのか。

「注意散漫」の歴史を振り返りつつ、近代小説と注意散漫との関係にも踏み込めればと思っている。

講師紹介

1966 年生まれ。英米文学研究。文芸評論。著書は『英詩のわかり方』(研究社)、『小説的思考のススメ』(東京大学出版会)、『幼さという戦略』(朝日選書)、『名作をいじる』(立東舎)、『史上最悪の英語政策』(ひつじ書房) など啓蒙書と、専門書としては『文学を〈凝視する〉』(岩波書店 サントリー学芸賞受賞)、『善意と悪意の英文学史』(東京大学出版会) など。マラマッド『魔法の樽 他十二編』(岩波文庫) などの翻訳もある。

ホームページ : <http://abemasahiko.my.coocan.jp/>